内沼晋太郎　ブックコーディネーター

八戸に来て、役所の人たちと話してもらえませんか。2014年5月、仙台で初めて会った金入健雄さんに、そう言われた。

『本の逆襲』という本を出したばかりのころだ。「全国どこでも行きます」と呼びかけて、ひたすら書店を回って、トークイベントをしていた。せんだいメディアテーク内のショップである「KANEIRI Museum Shop 6」でも話すことになり、金入さんはトークの相手だった。トークが終わった後に「ちょっとお時間を」と言われ、聞くところによると、こういう話だった。

株式会社金入は、仙台ではなく、青森県八戸市に本社がある。文具卸業のほかに、八戸でも書店を経営している。2013年10月、小林眞（前）市長が、三選を果たした。その政策公約には〈書店との連携により、本のセレクトショップ「八戸ブックセンター」を開設します〉と掲げられていた。「本のまち八戸」を目指すという。それをどう実現するか、役所の人たちが頭を悩ませている。

おもしろいと思った。八戸に訪れたことはない。かろうじて、港町だということはわかる。そこを「本のまち」にしようとしているのは、いったいどんな市長なのだろうか。八戸とはどんな場所なのだろうか。自分に何ができるかはわからないが、と前置きしつつも、二つ返事で快諾すると、6月には役所の人から同じ主旨のメールが来て、七月に初めて訪れた。

それからオープンまでの2年間。その後の5年間。足かけ7年間にわたって八戸に通った。2022年3月末で、ディレクターとしての任務は完了ということになった。自走を前提としているから、いつかこうなるのは当然のことで、やや長く続け過ぎたという気持ちさえある。けれどやはり寂しいので、それこそ何ができるかはわからないが、引き続きたまに連絡を取り合い、乗れる相談には乗ろうと、ボランティアのアドバイザーという関係性だけうっすら残してもらった。

八戸じゅうのあらゆる書店や図書館、読書団体などの方と話し合うところからはじまり、役所と民間書店とが連携して運営するための仕組み、掲げるべきコンセプトと選書、それに沿った内装や

デザイン、盛り込む機能、オープンしてからのさまざまな企画―この七年間で携わったこと、それに伴って考えたこと、起こったことだけで、一冊の本が書けてしまいそうなくらいだ。いったいそのうちの何を書けばいいのか、悩みつつも懐かしく思い出すのは人の顔ばかりである。

誰よりも、いま八戸ブックセンターで働いているみなさん。ここに文章を寄せている方をはじめとした、これまで八戸ブックセンターにかかわりを持ったみなさん。みなさんの顔が頭に浮かび、忘れられないのはもちろんのことだ。けれど紙幅が限られたここでは、おそらく本展にほぼ登場しないであろう人たちについて書いておきたい。

それは、ある時期この八戸ブックセンターにかかわり、そして突然の異動となった、何人かの市職員の顔だ。ただでさえ前例主義の行政において、慣れない本という分野で、前例のないことばかりの実現に尽力することになった人たち。みなさんがいなければ、自分はこんな場所で、こんな風景を見ることはできなかった。ところがどれだけその場に欠かせない存在になっていても、数年すれば否応なしに他の部署に行くことになるのが、役所という組織の避けられない通例だ。毎年「あの人が抜けるとさすがに」と戦々恐々としながらも、次に配属された人にまた助けられながら、歩みを進めていった。そしてふとしたときに、「あの人はどうしているかな」と思い出す。特に、オープン前後の難しい時期を支えてくださった、下斗米さん、松浦さん、熊谷さん、大木さん。途中から加わったものの、現場の要として欠かせない役割を果たしてくださった、佐藤さん、吉田さん、上野さん。上長として温かく見守ってくださった、風張さん、田湯さん。そしてあらゆることを大きく現場に任せてくださった、前市長の小林眞さん。お元気ですか。私は元気です。

多くの方の尽力があって、五年。果たして八戸は「本のまち」に近づいただろうか。それはたぶん、誰かが上から俯瞰して、イエスかノーかで評価するようなことではない。八戸に暮らす誰かにとって本が以前より身近な存在になっていれば、八戸を訪れた誰かにとって本が目的や楽しみのひとつになっていれば、「本のまち」はそれぞれの人の生活や思い出の中にある。これからもひとつひとつ、そんなきっかけが生まれていけばいい。

内沼晋太郎 shintaro uchinuma

ブックコーディネーター

1980年生まれ。NUMABOOKS代表。東京・下北沢「本屋B&B」共同経営者。八戸ブックセンターにはディレクターとして携わる。著書に『これからの本屋読本』（NHK出版）、『本の逆襲』（朝日出版社）など。